

日本災害リハビリテーション協会（JRAT）の研修会で特別講演を行いました (2024/7/13)

テーマ：災害時の医療の理想形：JRAT
 会場：オンライン（仙台市）

2024年7月13日（土）に、日本災害リハビリテーション協会（JRAT）の研修会で、災害医学研究部門の江川新一教授（災害医療国際協力学分野）が特別講演を行いました。

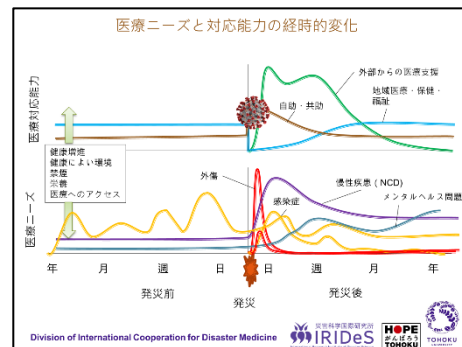
JRATは東日本大震災をきっかけに高齢化社会が災害に直面したときに、生活不活発病の悪化や新規発生を防ぐことを目的に設立され、2016年熊本地震、2018年西日本豪雨、2024年能登半島地震など国内で発生する災害において活動しています。JRATは各都道府県において災害対応への積極的な関与が可能になるような体制づくりを進めており、災害時の活動が広く認知され、公的な支援を受けられるように努力を続けています。

江川新一教授に与えられたテーマは「災害時の医療の理想形：JRATへの期待」であり、災害医療と災害時の医療の違いを明確にし、JRATがどのような方針で活動していくべきかを求められました。江川教授は、リハビリテーションという言葉には「復興」という意味があること、災害リスクがハザードとその曝露、地域社会の脆弱性、対応能力の関係性によって決定されることや、わが国の災害医療体制が阪神淡路大震災、東日本大震災を経て改善され、さらに新たな課題に直面しても柔軟に対応できること、地域医療をいかに早く機能回復させることが活動の主眼になっていることなどを説明しました。また、仙台防災枠組を中心に、WHOが2019年に策定した災害リスク・健康危機管理枠組（H-EDRM Framework）と、その研究ガイダンスについても説明し、日常の医療と災害時の医療が決して分断されているものではなく、日常の医療供給が地域のニーズにマッチしていることが災害に対してレジリエントな社会を構築することも説明しました。

高齢化社会において人々のからだところの健康（ウェルビーイング）を守るために、リハビリテーションの専門家としてどうしたらよいかを考えてもらうよい機会となりました。



災害医療と災害時の医療について



災害前から存在し、災害後に変化する健康のニーズと保健医療の供給能力